

香川県ゆかりの彫刻家イサム・ノグチの作品には、どんな思いがこめられているのでしょうか。彼の一生をたどり、作品を鑑賞してみましょう。

### ① 身近な作品を鑑賞しよう



オクテトラ 素材/コンクリート 大きさ 幅2m74cm 高さ2m24cm

この作品は、イサム・ノグチの「オクテトラ」という作品です。高松自動車道の津田の松原サービスエリアにあるものを、いろいろな角度から写した写真です。五色台少年自然の家や、札幌のモエレ沼公園にも同じものがあるので、実際に見たことがある人も多いと思います。

この作品は、同じ形のパーツが五つ組み合わさってできています。一つ一つの形はどんな形をしているのでしょうか。また、それぞれのパーツの底の部分にも丸い穴が空いていて、人間が中に入れるようになっています。中に入って穴から外をみるとどんなふうに見えるのでしょうか。イサム・ノグチは、どんな思いを込めてこの作品をつくったのでしょうか。イサムの一生をたどりながら考えていきましょう。



## ② イサム・ノグチの一生をたどろう

### イサム・ノグチとは

イサム・ノグチ（1904～1988年）は、20世紀を代表する彫刻家です。近代的な彫刻の理念と、様々な文化からインスピレーションを受けた形体が結びついた、簡潔で洗練された作品を発表し続けました。そして、その活動は彫刻の他、舞台美術、庭園、プロダクトデザイン（工業デザイン）、大地そのものを彫刻するかのような大規模の空間デザインなど、多岐にわたります。



イサム・ノグチ（マチュピチュの遺跡で）

©野口ミチオ

### 芸術家へ

イサム・ノグチを知るには、その生い立ちを考えることが重要です。父はアメリカで活躍した日本人の詩人、野口米次郎のぐちよねじろう。母はアメリカ人のレオニー・ギルモア。父はイサムの顔を見ることもなく帰国してしまいます。

母レオニーは、イサムを日本人として育てることを決意し、イサムが2歳のときに来日しました。母は、英語の教師をしながらイサムを育てました。イサムは、後に幼年期を過ごした茅ヶ崎を「故郷」とよび「毎日がすべて何かしら新しい発見だった子ども時代を、自然の変化に非常に敏感な日本で過ごしたのは幸運でした。」と述べています。

しかし、異国から来た親子に対する当時の人々の目は厳しく、イサムを日本人としての教育を受けさせることが次第に難しくなります。母はアメリカでの教育を望むようになり、イサムは14歳の時、一人でアメリカ行きの船に乗り込みます。

イサムは高校を卒業し、コロンビア大学医学部に入学します。イサムは芸術家になることを望んでいました。しかし、高校卒業直後に師事した彫刻家に「君は彫刻家に向いていない」と言われ、医学を学ぶ決意をします。

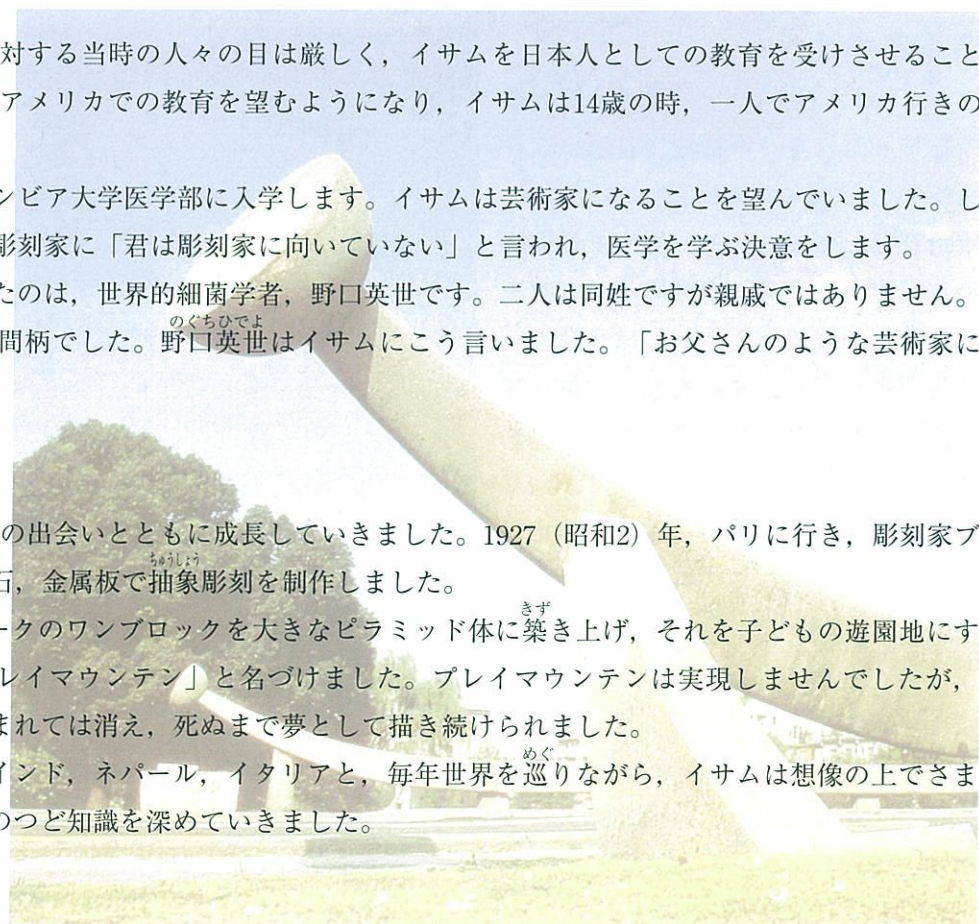
医学生イサムを芸術家に変えたのは、世界的細菌学者、野口英世のぐちひでよです。二人は同姓ですが親戚ではありません。野口英世はイサムの父と親しい間柄でした。野口英世はイサムにこう言いました。「お父さんのような芸術家になりなさい。」

### 世界で活躍するイサム

芸術家イサム・ノグチは数々の出会いとともに成長していきました。1927（昭和2）年、パリに行き、彫刻家ブランクーシの助手を勤め、木、石、金属板ちゅうしゅうで抽象彫刻を制作しました。

1933（昭和8）年、ニューヨークのワンブロックを大きなピラミッド体きずに築き上げ、それを子どもの遊園地にする構想を思いつき、これを「プレイマウンテン」と名づけました。プレイマウンテンは実現しませんでした。このテーマはいろいろな形で生まれては消え、死ぬまで夢として描き続けられました。

その後、ギリシア、ハワイ、インド、ネパール、イタリアと、毎年世界を巡りながら、イサムは想像の上でさまざまな関連を見いだしては、そのつど知識を深めていきました。



生きる

©野口ミチオ





黒い太陽 1969

©野口ミチオ

1950（昭和25）年に19年ぶりに来日。広島平和公園への入り口となる二つの橋を制作。その後、ニューヨークと日本を往復しながら多くの作品をつくりました。

イサムは、大規模なランドスケープ（景観）・プロジェクトでも知られるようになり、パリのユネスコ本部の庭（1956～1958年）、エルサレムのイスラエル美術館のピリーローズ彫刻庭園（1960～1965年）などがつくられました。

1960年代にイサムは、さらに多くの時間を日本で過ごすようになりました。日本に長期間滞在するにつれ、伝統的な日本の自然のとりえ方、特に自分自身と自然の関わり方というものに次第に傾倒するようになりました。

## 香川県牟礼へ

イサムは、石に対する優れた伝統と技術を持った日本で本格的に石彫に取り組むために、戻ってきました。牟礼町は、庵治石として知られる、日本で最高級の花崗岩の産地で、牟礼町から五剣山に通じる旧庵治街道沿いには多数の石材店が軒を並べ、優れた加工技術を持った石工が集まっています。香川県出身の画家、猪熊弦一郎の紹介で以前この地を訪れていたイサムは、様々な人々の協力もあって、この地を日本での制作拠点と決めました。

1968（昭和43）年、彼は友人に当たった手紙で次のように喜びを表現しています。「私は大きな石にとりかかったところです。それは瀬戸内海の四国にある庵治村の山ふところのどこかで形をなしたものです。1年のうちこの時期は言葉にできぬほど美しい。いや、いつもそうなのです。というのもここは荒らされていないのです。家々は常に昔のままなのです。」

この地で最初に制作されたのが、代表作の一つとなる「黒い太陽」です。この作品は、アメリカのシアトル市



イサム家 照明器具（あかり）もイサムの作品

©野口ミチオ





イサムのアトリエ

©野口ミチオ

美術館の依頼で制作したもので、材料はブラジル産の黒御影石です。

牟礼でアトリエとなる敷地を提供し、制作パートナーとしてイサムの活動を支えたのが和泉正敏氏でした。アトリエの隣接地には、日本での住居として、200年近く前の豪商屋敷（旧入江邸）を伝統的な建築技法により改修・移築した「イサム家」が造られました。

晩年、イサムは、1年の半分ほどを牟礼で過ごしました。牟礼のアトリエでは、パートナーの和泉氏の協力を得て、自然のプロセスを大切にしながら、様々な石の作品を制作し続けました。「アトリエ」と「イサム家」、そして晩年に創られた「彫刻庭園」は、「イサム・ノグチ庭園美術館」として、1999（平成11）年から一般に公開されています。

## 夢の実現

一方、大阪で行われた万国博覧会では、巨大な人工池の中に12の壮大な噴水をつくりました。1970（昭和45）年以降、イサムはニューヨークと日本、イタリアを、毎年、定期的に行き来する生活を送りました。イサムには安住の地など求めない「世界人」としての生き方が、最も性に合っていたようでした。

1986（昭和61）年には、第42回ヴェネツィア・ビエンナーレのアメリカ代表に選ばれました。80歳になってようやく『アメリカの偉大な芸術家』として認められたイサム・ノグチ。同じ年、日本で京都賞を受賞。翌年アメリカ国民芸術勲章を受賞します。

そんなイサムに札幌市から「モエレ沼公園」ランドスケープデザインの依頼が舞い込みました。子どもたちが遊びながら、彫刻を感じることでできる、夢の公園のマスタープランが完成したのは1988（昭和63）年。プラン完成と誕生日を祝った直後の12月30日、イサム・ノグチはニューヨークで静かに息を引き取りました。84歳でした。



イサムノグチ庭園美術館（ニューヨーク）

©野口ミチオ





モエレ沼公園の遊具

モエレ沼公園は2005（平成17）年にすべてが完成し、若い頃からの夢がやっと形になったのです。

彼は、公共の場は、多くの人が再び訪れたいくなるような、あたたかい歓迎を示す環境であるべきだと常に思っていました。これがモエレ沼公園を彼が設計した精神です。そこを訪れる人たちは、イサムが常に表現していた、人間的でありたいという願いを見ることができます。そしてその広大な公園の中に不思議なほどあたたかく魅力ある雰囲気必ずや感じることでしょう。

### イサム・ノグチの言葉

「私は大きいものをつくるのが大好き。時間さえあれば、地球そのものを彫刻したい。」

## ③ 香川県にあるイサム・ノグチの作品



①五色台少年自然の家「オクテトラ」



- ③高松空港「タイム・アンド・スペース」（29ページ参照）
- ④木田郡牟礼町牟礼「イサム・ノグチ庭園美術館」（27ページ参照）
- ⑤木田郡牟礼町山椒山公園
- ⑥津田の松原SA下り線「オクテトラ」（24ページ参照）
- ⑦高松市美術館
- ⑧香川県文化会館
- ⑨県立善通寺第一高等学校「オクテトラ」

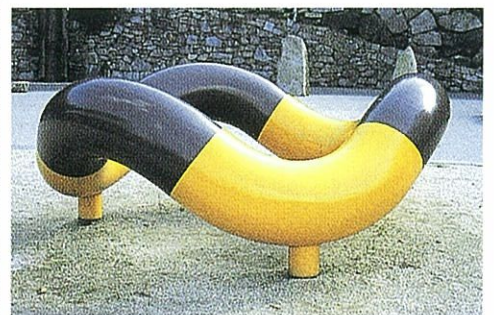


②香川県庁本館2階「アーケイック」

※現在は県立ミュージアムに移管されています。



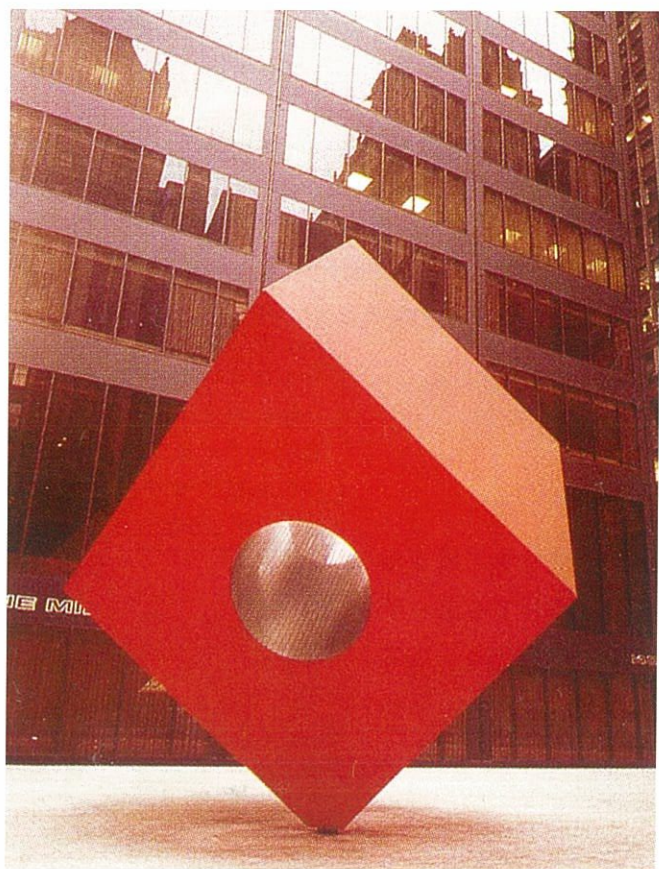
⑤「シーソー」



⑥「プレイスカンプチャー」



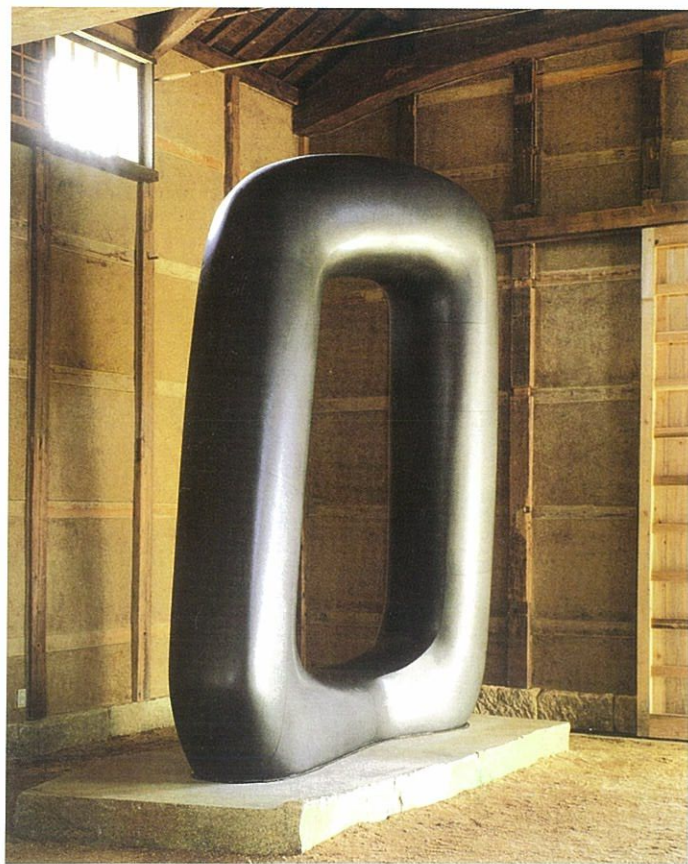
④ 代表的な作品を鑑賞しよう



赤い立方体 1968

©野口ミチオ

ニューヨークのビル街の中にある、一点で支えられて自立する赤い立方体。鮮やかな赤の強烈な色が印象的な作品。高さ7.3m



エナジーボイド 1972

©野口ミチオ

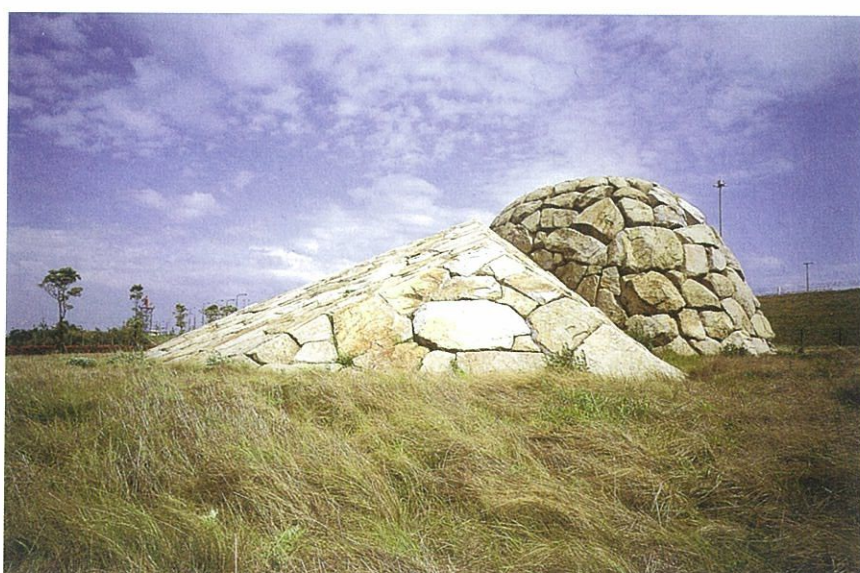
牟礼のイサム・ノグチ庭園美術館にある、巨大な黒花崗岩（御影石）の作品。ゆっくりゆ揺れながら立っているように見える。高さ3.6m



ブラックスライドマントラ 1992

©野口ミチオ

札幌大通り公園にある螺旋形の滑り台。雪の中でも目立つように黒花崗岩が選ばれた。幅4m



タイム・アンド・スペース 1989

©野口ミチオ

高松空港の広場に設置された、庵治石を高く積み上げた遺作。その斜面は、彼方へ導くかのように、大空へ向かって延びている。幅25m、奥行き27m、高さ9m